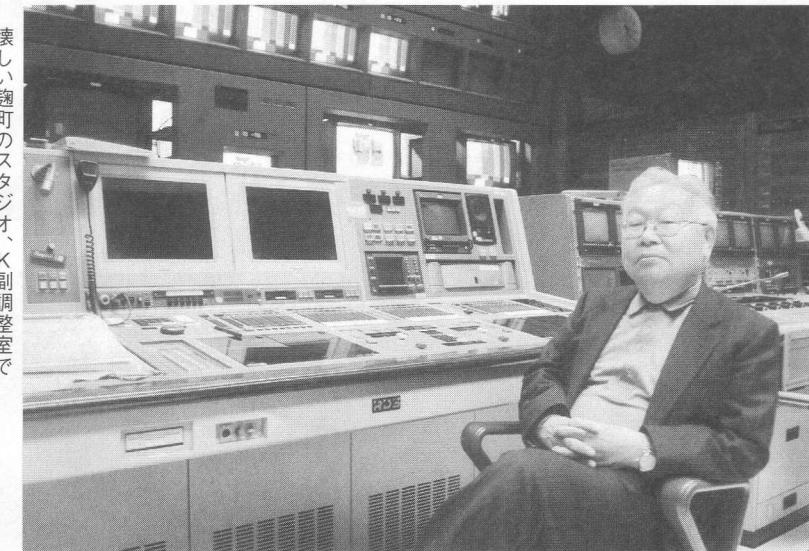


# テレビ創生期の制作ウラ話

## —昭和天皇も見ていたテレビドラマ—

野崎 元晴 (NTV)



みんぐる語り放送史  
題字 中川順

昭和20年(1945)8月15日

戦争は終わった。私個人に関して云えば、輝く陸軍将校生徒から「ナンも価値のない人間」になり下がつた。東京は、一面の焼け野原。新橋のプラットフォームからは東京湾が丸見えだった。

それから8年後、この貧しい日本でテレビ放送が始まろうと、誰が想像しただろう。

昭和28年(1953)2月にはNHKが、8月には日本テレビがテレビの電波を発射したのだ。だが受像機がない。朝鮮戦争特需も終わり、巷には失業者がふれていた。一インチ一円もするテレビは、所詮高嶺の花だつた。開局準備に忙しい?日本テレビに入社したのが28年の6月半ば。行ってみて驚いた。7月開局予定だというのにテレビ塔も土台がやつと出来たところ。正面に二階建ての工事現場事務所のような建物。それが社屋だという。スタジオと称する所は壁だけで空ツボの倉庫のようだ。これは大変なところにきてしまつたぞというのが正直な印象だつた。

テレビとはどんなものかも知らず、制作スタッフにしても、われ

われ新卒者数名の外は芝居、それも軽演劇番の出身者。映画界からはテレビをバカにして誰も来やしない。映像経験者はゼロという有様だつた。

アメリカから来るはずのカメラなどの放送機器も、当初開局予定だつた7月になつても来ない。最新鋭の機材を製作中だから遅れているとのいいわけだけ。

われわれはNHKの放送を見たり、ドラマのリハーサルの真似事をして過ごす。夜は、9時頃のNHKの放送終了まで観て帰宅、家にテレビなんかはないのだから会社のテレビを観て勉強するしかない。

### カメラ5台で ドラマも中継も

7月も終わり近く待望のカメラが到着したが、たつたの5台。それでスタジオ制作の全番組、そして中継もやるというのだから大した度胸だつた。野球や大相撲の中継にカメラが2台出でしまうと残りは3台。3台で1スタ、2スタの番組を作る。両スタジオ2台ずつのカメラを使うとすると1台足りない。仕方なく1台を使いま

わす。2スタで使つてはいるカメラのうち1台を早く終えて1スタに移動して1スタの番組を始めるのだ。ドラマのカメラリハーサルなどまともに出来る筈がない。

当時3つのスタジオがあつたが、1スタが60坪、2スタが30坪、3スタにいたつては数坪、まるで物置だ。これで待つたなしの生放送でテレビのドラマは作られたのだ。

。

日本テレビが本格的ドラマの枠として月曜8時に『NTV劇場』を編成。その第1作が8月31日午後8時からの30分枠だつた。前からアメリアのテレビドラマを研究していた内村直也作『私は約束を守つた』だつた。出演は轟夕起子さん、村上冬樹さん。

社内にはリハーサルする部屋がなく歌舞伎座横にあつた日本芸能連盟の部屋を借りた。

私が6月に入社して、編成局制作部に配属された頃は、ドラマは1班3人、私は池田義一さんがチーフの班で主にFM(フロアマネージャー)をやつていた。

開局の頃は、プロデューサー業務というか仕込みは、殆どが日本芸能連盟(通称芸連)という会社



エノケンの『水戸黄門漫遊記』

河野さんがエノケン劇団文芸部出身の縁で、昭和28年12月のクリスマスイブに、エノケンこと榎本邦楽、演芸等の番組のディレクターを担当していた。

9月中頃からスタッフも少しづつふえ、私は、新しく入社した河野和平さんのチームに移り、昼の15分コメディのフロマネや邦舞、邦楽、演芸等の番組のディレクターを担当していた。

がやつており、われわれ日本テレビスタッフはディレクター業務をやつていた。それでも10名足らずでドラマなどの演出を全部こなしていたのだから相当に忙しかった記憶がある。



開局1周年記念『緑の風景』日比谷公会堂からの中継放送

健一さん、ターキーこと水の江滝子さんの共演で、今で云うバラエティ風ドラマを1スタジオ2スタジオを使つた。2つのスタジオ、3台のカメラを使った番組はこれが最初だつた。

当時、映画界から軽蔑のまなざしで見られていたテレビに出演された最初の大スターが榎本さんだといつても過言ではないだろう。

その後も榎本さんはオペレッタ『嘘』(中村メイコ共演)や開局1周年記念番組『ダーア』(後に『最後の伝令』と改題され、日曜の演芸番組のレギュラーに、まだ二つ目だった林家三平さんがいたが、彼の天衣无缝さはFM泣かせであった。リハーサルと本番はまったく違うし、リハーサル中に置物の生花は食べてしまう。私はFMを断りたいくらいであったが、昭和の爆笑王の片鱗をうかがわせるものがあった。

### 生ドラマで大騒動

受像機の普及はままならず、街頭テレビ頼りの民放にはスポンサーの出足も鈍く、開局数ヶ月で放送時間が、昼は11時半から午後1時半まで、夜は6時から9時15分まで短縮され、番組企画もなかなか固まらなかつた。そのスキをついてといふのではないが、私は急

劇や有楽座で上演されて有名になり、そのすべてで私はフロマネをつとめた。

開局数ヶ月を経て日本芸能連盟のプロデュースは終わり、番組はすべて日本テレビ社員の自主制作となつたが、私にはなかなか出番がなく、相變らず河野さんの下でADやFMを続けていた。

開局2年目だったか、土曜日の8時にボッカリと60分の空時間が出来た。これ幸いと『大人は判つてくれない』というドラマ企画を出したら通つてしまつた。

最初の1時間ドラマだった。脚本、岡田達門。出演は、最初東映の中原ひとみさんと交渉、本人の了解を得たにもかかわらず東映の横ヤリでご破算となり、急遽、安西郷子さんに変更、助演に飯田蝶子さん、高杉早苗さんらのベテランでかためた。

安西さんはテレビ出演が初めてどころか、テレビそのものを見ていない。テレビドラマというものが、ぜんぜんお判りになつていなかつた、映画と同じくNGは出せるもの、セリフは全部覚えなくていい。テレビドラマというものが、ぜんぜんお判りになつていなかつた、映画と同じくNGは出せるもの、セリフは全部覚えなくていい。飯田蝶子さんにテレビのセリフは全部暗記しなければダメよ、NGは出せないのよ、といわれ真つ青になり、本番3日前に降りたいと云いだす。そこをなだめすかして、

本番に突入。だが、そこで大事件が起つた。テレビの経験のない高杉早苗さんが何を取り違えたか突如としてカメラのいないセットでセリフをしゃべり始めて大騒動。何しろ生本番だ。なんだかんだとつくりつてやつと本番終了。しかし、1時間ドラマが45分で終わってしまった。放送当日の朝提供が決まつたドラマのスポンサーからお咎めはなかつたものの、この直後、9時から放送のニュースが8時45分から流れ、定時のが9時には終わつてしまい、ニュースのスポンサーからは大目玉を喰らつた。

この失敗で私はその後ドラマのディレクターはやらせてもらえないかつた。

昭和31年7月、120坪の新スタジオが完成。カメラも3台使用可能、いよいよ本格的ドラマを作る舞台が出来た。完成に先立ち、その年の春、新スタジオを使う企画を募集していた。

### 獅子文六アワー誕生

私は追い込まれていた。この千載一遇のチャンスを逃しては二度とディレクターになれないどころ

が制作からはずされかねない。先の大失態作『大人は判つてくれない』の作者、岡田達門氏がラジオで獅子文六先生の脚色をしていたのを幸い、文六先生への紹介の労をとつていただいた。獅子文六といえば、『自由学校』『てんやわんや』『やつさもつさ』などを新聞に連載、映画化は大当たり、石坂洋次郎、石川達三と並ぶ新聞小説三大巨匠のおひとり。テレビ化など許してくださる筈はないと思ひながら、岡田さんとともに大磯の先生のお宅におそるおそる伺つた。

その25歳の若輩に、先生は快く会つてくださり、戦前の作品ならばどれでもよいよと、簡単に許可して下さつた。そして、テレビはまだ海のものとも山のものともわからぬが、必ず発展しきな力を持つようになる、しつかり作つてほしい。これからはテレビドラマを極力見るようになつたと温かい励ましの言葉まで頂いた。

企画会議も無事通過し、『獅子文六アワー』とメインタイトルも決まつた。

さて第1作は何にするか。戦前松竹大船で映画化された、おばあさんと孫娘の情愛を描いた『おばあさん』に決めた。主演は映画と同じ飯田蝶子さんにお願いし、松竹大船のベテランに脇を固めていた。多くの映画界の方々が出演する、当時としてはユニークなキャステイングであつた。

条件は、脚本は必ず放送前に送ること、月一回位は大磯に来て先生の意見を聞いてほしいとのこと。全く有難いお言葉であった。

さて、もう一つの大問題は原作

料。先生の映画の原作料は最高と聞いていたので、それこそおそるおそるテレビ制作の現状を説明し、一回3万円でお願いしたいと本当に小さい声でお願いしたところ、ハツハツハツと笑われ、映画並みといえば局はつぶれてしまうだろう。それでいい。とにかく面白いドラマを作つてくれといわれ、またまた大感激。

先生の戦前の作品は、主に婦人雑誌に連載されていた主婦対象の家庭小説、放送も、当時ホームドラマというジャンルはなかつたら、企画書には主婦を中心として一家揃つて楽しめるドラマと書いた覚えがある。



『おばあさん』出演中のスタジオ記念写真—後列中央に若き筆者が見える—

映画『今ひとたび』で好演した竜崎一郎さん。

さて主役の悦ちゃんは誰に、何しろ小学2年生の主役だ。当時の名子役といえば松島トモ子、彼女は小学2年生、悦ちゃんにはピタリの年齢、演技にも文句なし。だが『鞍馬天狗』の杉作や『快傑黒頭巾』のチヨビ安など、映画に出でつぱりだ。しかも撮影は京都が多い。駄目もとで事務所に当たつてみた。案の定スケジュールは一杯だったが、原作に惚れてくれた飛行機でのトンボ返りのくり返しだった。

### 昭和天皇とテレビ

『悦ちゃん』は1回目から大好評。原六朗氏の作詞・作曲になつた『マ、』という主題歌にのつたラストのアップ、母を慕つてほろりと流すトモ子ちゃんの涙がお茶の間の視聴者の紅涙をしぼつた。

『獅子文六アワー』の2作目は『悦ちゃん』に決めた。妻を亡くした貧乏詩人とその娘がけなげに生きる物語。2人を温かく見守る婆やには、『おばあさん』に引き継ぎ飯田蝶子さん、貧乏詩人には、

ころが放送3日前、飯田蝶子さんが40度近い熱を出してしまった。代役は無理。リハーサルは飯田さん抜きでやつた。本番当日、責任感が人一倍強い飯田さんが病を押して出演、何とか1回目の放送を終了することができた。

『獅子文六アワー』の2作目は『悦ちゃん』に決めた。妻を亡くした貧乏詩人とその娘がけなげに生きる物語。2人を温かく見守る婆やには、『おばあさん』に引き継ぎ飯田蝶子さん、貧乏詩人には、

もやま話をされていた。そこに、文六先生が徳川無声氏らとともに呼ばれたのだ。

一時間の予定が、天皇も大層興にのられて話がはずみ、2時間近くに及び、しかも、大半が『悦ちゃん』の話題だったという。

日ならずして文六先生から電話があり、天皇が皇后とご一緒に毎回『悦ちゃん』をご覧になり、毎週火曜日を心待ちにしているとおつしやられた。会合のあいだ、文六先生に質問なさることが多かつたと大変喜んでおられた。

日本テレビで毎週火曜日夜に放送していた『雨・風・曇』という番組があつた。漫画家の近藤日出造さん司会の対談番組で徳川無声さんが、天皇との会合の内容を披露し一般の知るところとなつた。また、月刊『文藝春秋』にも「天皇大いに笑う」のタイトルで詳報された。

天皇は貧乏詩人と娘の話に大変興味を示され、本当にあつた話なのか?と文六先生に念を押されたらしい。

天皇が裏長屋の暮らしなどご存知のはずはなく、戦後、宮中でも食糧難でご苦労なさつたとはい

え、悦ちゃん父娘の貧乏話など想像もつかなかつたのではないか、だから詩人の收入や暮らしが向きなど細かくご質問なさつたに違ひない。

10年ほど前までは神とあがめられていた天皇、皇后両陛下が仲むつまじくテレビをご覧になつて、その感想を話し合われている光景など想像もつかなかつたが、これ以来、昭和天皇に非常な親しみを感じたものだつた。

それから何年か後、初めて天皇の記者会見が実現したとき、「天皇はどんな番組をご覧になつていますか?」との質問に「テレビはよく見ているが、局の間の競争が激しいと聞いてるので、どれを見ているのかは遠慮したい」とお答えになつた。『悦ちゃん』の頃は、NHK、NTVと、開局間もないKRT(現TBS)しかなく、視聴率調査などもなかつたため、天皇はおおらかに一番組のことを率直にお話になつたのだろう。

### ホームドラマの全盛期

文六先生は以後『獅子文六アワー』にことのほか力を注いでくださり、大磯のお宅に伺う度に脚本、

演出についてご教示を頂いた。さすが劇作家岩田豊雄先生。その後の私の演出に与えられた影響は大きかった。また、伺うたびに、大磯のうなぎ屋で食事を共にして頂き、人生の教えを受けた。先生のお嬢さんが松島トモ子の

『太陽先生』など次々と文六先生の戦前の作品を放送し、最新作『夫婦百景』へとつながつた。

その後、『南の風』『青空の仲間』『太陽先生』など次々と文六先生の戦前の作品を通してテレビのホームドラマのスタイルが出来上がって、その後テレビ界はホームドラマの全盛期を迎えた。

思えば初期のテレビドラマのスタイルには熱気がみなぎつていた。何しろ生放送、撮り直しはなし。時間内におさめなければいけない。リハーサルを重ねても正確なタイムが計れない。メリハ、ランスルーを重ね、最後にカットされる役者さんもいた。カメラは

3台、ロケはフィルム以外は不可能など制約が多かつたにもかかわらず、全員「映画に追いつけ、追い越せ」と努力した頃が懐しい。



ドラマ『悦ちゃん』の松島トモ子・飯田蝶子

写真撮影協力・写真提供  
日本テレビ